

Essay

ヒルデガルト研究ノート (一)

石 井 誠 士



序

現代は、生命が根本的に問題となった時代である。近代、そして特に20世紀が取り残した問題の第一が生命である、と言ってもよいであろう。私たちの身体、性、老い、病むこと、死、家族、さらに環境など、それらのいずれにも、近代文明特有の問題が現われてきている。それらの問題が一つに収斂するところに、生命の問題、私たちが生きていることそのことの問題が

ある。生命とは何か。特に、人間の生命とはいかなるものか。結局、私たちは、何のために生きているのか。

その問いに答えることは、難しいが、ここでは、私たちは、ヒルデガルト・フォン・ビンゲン、12世紀ヨーロッパの思想を取り上げる。これは、この思想に、私たちの自覚、生命の直観の思想の一つの徹底した形態を見いだすことができる、と考えるからである。

1. ヒルデガルトの生涯と時代

ヒルデガルト・フォン・ビンゲン (Hildegard von Bingen) は、1098年に、今日のラインヘッセン州ベルマースハイムで生まれた。幼少の頃から既に「直視」の経験をしていたが、8歳の時に、ラインの一支流ナーエの河畔ディジボーデンベルクのベネディクト会修道院に入り、ユッタ・フォン・シュパンハイムの教育を受ける。そして、15歳の時に正式に神の道に生涯を捧げる決心をする。さらに、1141年から彼女は、神の呼び声に従って、彼女の見たものを文字にし始める。この著作がきっかけになって、彼女は、世間と対話を始め、ドイツの国外にも知られるようになる。一人の謙虚な尼僧は「ドイツの預言者」*prophetissa teutonica* になる。彼女が内なる光に照らしだされて書いたものは、1147年トリアの公会議にかけられるが、承認される。その際、法王エウゲニウス3世自ら、書簡を認め、彼女を「いのちの薫」*odor vitae in vitam* と呼んだ。それから30年の間に、次々と大作が生まれる。彼女を慕って多

くの若い人たちが集まったために、ラインの兩岸、ビンゲンのルーベルツベルクと対岸のアイビンゲンとに、二つの修道院が建つ。300通以上の手紙によって、彼女は、民衆のさまざまな問題にも、また、パリ大学からの高等な神学的問題にも答え、皇帝や法王たちとも対決していたことが知られる。そして、自身、生涯、不治の病に苦しんでいただけに、彼女は、他の人の病苦に対する共感も強かったし、その痛みの底から、彼女の珠玉のような祈りの歌が生まれる。彼女は、自然における癒しの力に関する博識によって、ドイツの最初の医師と呼ばれる。彼女は、1179年9月17日、ルーベルツベルクの修道院で死んだ。

ヒルデガルトが生きたのは、まだヨーロッパにイスラムの文化が流入して新しい、ルネッサンスから近代へと展開する学問の運動が勃興する前、十字軍が派遣され、皇帝と法王の対立が激化した時代、あのアベラール（1070-1142）やベルナルド（1090-1153）、あるいは、バルバロッサやコンラート2世やヘンリー2世の時代である。そうした激動の時代にあって、彼女の81年の生涯のうち、半生は、もう世に全く隠れて、なにごともないかのように、過ぎている。ところが、その後半生において、彼女は、修道院に隠遁してはいるものの、異常なほど積極的に公けの場に出ていく。世を完全に捨てた人であることと、その在り方を離れずに、世に出ていくこととが、一人の人間において、徹底したかたちで起こっている。このことが彼女の生涯の際立った特徴をなす。

2. ヒルデガルトの作品

ヒルデガルトは、既に少女時代から、「直視」、ある内なる眼、内なる光、彼女のいわゆる「活きた光」によって見ることができた。「私はこれらの視像を常に魂の中に見る。私は、それを外的な耳で聴くのではないし、私の五官によって知覚するのではなく、専ら私の魂の中に、開かれた眼で、直視するのであるが、決して恍惚状態に陥るのではなく、むしろ、昼も夜も、覚

めて、見るのである」と彼女は語っている。

1141年から10年の間に、彼女は、最初の大著『道を知れ』*Liber Scivias* を仕上げる。これは、宇宙論と人間学とが神学と緊密に結びついたかたちの信仰の書である。さらに、1158年から1163年の間には、『真実の生活の書』*Liber vitae meritorum* が書かれる。ここでは、善と悪との中間にある人間の存在が描かれる。そして、1163年から1173年の間には、『神の作品の書』*Liber divinorum operum* が生まれる。ここでは、創造から終末までの救済史が説かれている。

以上は、神学的著作であるが、彼女は、同時に、自然学者でもあって、1150年から1160年の間に、『創造におけるさまざまな自然の微妙な性質についての書』*Liber subtilitatum diversarum naturarum creaturarum* を書く。この書の中で、自然のさまざまな知識と並んで、病気の原因と癒しとが述べられる。ヒルデガルトの自然学がめざしているのは、その時代の民間医学から生まれて、一般民衆に用いられる医薬の書であるが、そこにはまた、ヒルデガルト独自の観察と経験も入っている。この原理的な自然学の書の後に、動物学や植物学、さらに、鉱物の根源と宝石の意義についての書も書かれる。

ヒルデガルトの医学の大きな特徴は、それが宇宙論の中に組み入れられ、さらに、人間学的な性格をもった信仰の知と結びついているというところにある。したがって、『病気の原因と癒し』の叙述は、世界の創造に始まり、宇宙の構造を経て、世界の諸要素にまで至るのである。そして、彼女は、人間の形成、その胎児の体型、その成長の諸局面、健康なからだと病気のかからだの状態などを記述している。疾病については、身体の全体にわたって、体系的に語られている。特に詳しく語られるのは、古代から伝えられた生活法 *diaeta* であるが、これは、今日のいわゆる「ヒルデガルト医学」の範囲を越えた意義をもっている、と言わねばならない。

3. 病理学と医学

ヒルデガルトの神学的世界において、人間が、さらに自然が、積極的意義をもっていることは、特筆すべきである。

彼女にとって、自然は、決して、近代的自然科学の自然のように、実験によって真理が確認される、方法的に限られた空間を意味しない。自然は、むしろ、さまざまなしるしに満ちた世界全体の意味の担い手にはかならない。しるしは、石や星において、あるいは、植物や動物と共に、あらゆる元素的な力について、また、癒しの言葉でもって直接にも、人間に語られるのである。「あらゆる元素は、人間に自由に仕えた。それは、人間がいのちをもっていることを、元素が感知したからである。元素は人間の企図するところにやってきて、人間と共に、そして人間もまた元素と共に働いた」とヒルデガルトは語る。

彼女の直視した世界において、どこまでも人間が中心をなす。彼女は、人間を、神の作品 *opus Dei* として、しかも神の創造の凝縮したものとして、世界の中で、他のあらゆる存在よりも優遇された存在として、見る。しかし、このことは、決して、いわゆる人間中心主義を意味しない。むしろ、それは、人間が、世界の中心として、世界の一切の存在者に対し責任をもつ存在者であることを意味するのである。人間は、作品 *opus*、つまり、「作られたもの」であると同時に、「作るもの」*homo operans* である。「作られたもの」の中の唯一の「作るもの」として、彼は、全被造物を代表して、世界全体を自らに映しながら、一步一步、世界における神の創造の仕事を完成していく使命をもっている。彼は、理性的存在、つまり、言葉をもった存在として、世界と絶えず語り合い、世界の一切の存在者の在り方に責任を有するのであり、世界の救いを左右するもの、と言わねばならない。

人間は、その身体によって、宇宙に、あたかも一本の木における枝のように、つながってい

る。世界の編み目を手中にする彼は、その決断により、善と悪との両極の間を振れ動くのである。「人間のこころから、世界の土台石へと一筋の道が通じている」。

そこで、人間が自律的になり、自由になり、自らの被造性の根から遊離して (*superbia*)、世界の編み目からただ独立に働こうとすると、被造物の本来の関係は乱される。人間は、根源にも、また、被造物の連関にも、そして、実は、自己自身の存在にも、反抗するものとなる。かくして、人間は、罪に陥った。つまり、彼は、病み、死に服する者となった。しかも、彼は、彼のこの内的な矛盾を歴史を貫いて担ってゆかねばならない。

病気とは、実は、人間の本来の在り方 (*constitutio*) からの頽落態 (*destitutio*) を指示する微表にはかならない。それは、黒胆汁質 *melancolia* の概念により説明される。この病気の象徴としての憂鬱状態 (*Schwermut* 重い心) に対向して働くのが自然ないのちの力としての「緑の力」*viriditas* である。それ故、病気の状態には、同時に、そこに、いつでも、人間をその本来の在り方へ、つまり癒しへと導く回復 (*restitutio*) の要素が存するのである。人間の存在には、常に、自己の底から、その本来の在り方が呼びかけ、働きかけているのである。病気とは、その呼びかけの声と言ってもよい。

しかし、人間は、通常、自己の本来の在り方の呼び声が聴けなくなっている。それ故、その本来の在り方から離れて、疎外の状況のもとに生きている。彼は、死の影の中で、まちがった道を、あらゆる危険に晒され、地上のさまざまな思い煩いの中に自己を見失いながら、さまよっている。かくして、人間は、身体的にも、黒胆汁質が支配して、病む者となる。

ヒルデガルトの場合、病気は、決して、近代医学がずっと追求してきたように、病原の結果の発現過程とは見なされない。それは、むしろ、人間の在り方、実存の問題であり、人間自身の本来の在り方の欠如の状態を意味するのである。したがって、健康、換言すれば、癒しとは、

人間のその欠如の状態からの自己の本来の在り方の回復にはかならない。そして、それを可能にするのが、人間の被造性の基から働き出る「緑の力」、自己を越えて、自己の底から自己に働いて自己を立てる、いなむしろ、自己がそこで根源的に立たんとする決断にはかならない。このように、癒しの問題と救いの問題とを切り離さず、一つに見ており、しかも、癒しを、どこまでも、超越的にして内在的に、自発的に、自然にして自由に働く作用として把握したところに、ヒルデガルト医学の比類のない特徴が存在するのである。

人間の本来の在り方は、その有限性を抽象しては、考えることができない。まさしく、生が限られていること、死にゆきつつ生きゆくことの知識、いなむしろ、生のその終りからの自覚こそ、逆説的であるが、生が全体的な、無限な在り方を実現する不可欠の要素をなしている。癒しとは、死と一つの生の自覚における、死して復活することである。この終末論的視点からは、癒しと救いは、人間の実存に常に現在している、と言わねばならない。その、癒しと救い、すなわち、人間の超越的にして内在的な作用としての *salus* の永遠の現在を現実証するものが、ヒルデガルトの場合、言うまでもなく、キリスト、かの「偉大な医師」*medicus magnus* にかならない。人々を導き、いたわり、癒すべく神より召された者は、すべて、キリストを模範とするのである。彼らは、思慮 (*discretio*)

と慈悲 (*misericordia*) との徳をもって、キリストを模倣せねばならない。それ故、医師のエートスは、疾病の治療、是が非にも患者の病気を治そうとすることに存するのではない。それはむしろどこまでも慈悲のところに、死して生きる永遠の生命への配慮に、あるのである。

4. 人間と世界

ヒルデガルトの場合に、救いのことと癒しのこと、精神的なことと身体的なことが、切り離されず一つであるということと、人間が世界の中心をなしていることとは、深く結びついている。被造物の一つである人間が世界の中心であるというところに、人間の運命と使命とがある。「人間のところから、世界の土台石へと一筋の道が通じている」と語られるとおりである。

しかしながら、このことは、人間が、自己と世界の中の一切の存在者との存在に対し責任をもって存在することによって人間である。人間が世界の中心であるということはそういうことである。一切の存在者の在り方、その救いと滅びとが、人間の在り方に依存する、それによって決まってくる、ということである。人間が真実の在り方をしていなければ、彼を取り巻く世界も真実でなくなる。人間の存在の真理は、世界の存在の真理とパラレルな関係にある。それ故、問題になるのは、結局、人間、私たちの具体的な存在、実存である。世界の存在者との関係における私たちの自己の存在が問題である。